

消えるタトゥーを装う —現代身体装飾の文化人類学的考察

松嶋 冴衣

1. はじめに

本研究の目的は、「消えるタトゥー」と呼ばれるフェイクタトゥーの実践を記述し、現代日本社会においてその装いがどのような意義を持つのかを考察することである。装いとは、社会に規定されたものとして人間が普遍的に行なう身体上の装飾であり、本研究で言及するイレズミやフェイクタトゥーはその一形態である。装いは個人の営みでありながら、社会によって規定されてもいる(エントウイスル 2005: 11)。装いに関して、現代の人類学は非西洋文化における「おしゃれ」や「衣服」の意味や実践、そして民族誌的な営みに焦点を当ててきた(エントウイスル 2005: 62)。

本研究では、装いを身体装飾や身体変工を含む概念として捉える。そして、これまで装いに関する議論の対象となつてこなかったフェイクタトゥーに着目する。フェイクタトゥーはイレズミをはじめとする他の装いと比較してどのような特徴を持ち、フェイクタトゥーとはどのような装いであると言えるのか。そして、フェイクタトゥーは「偽物の」イレズミなのか。これらを明らかにしながら、イレズミが悪とされる日本社会において、それと似た見た目を持つ「消えるタトゥー」を装うことの意義と効果を検討していく。

2. 理論的背景

(1) 装いとはなにか

『広辞苑第七版』によると、日本語における「装い」の一般的な用法は「外見や身なりを(美しく)整えること」だとされている(新村 2018a; 2018b)が、学問領域において「装い」はどのように定義されてきたのだろうか。

例えば、西洋近代思想の論客たちによって、装いは人間特有の行為であるとされ

てきた(ゴルセンヌ 2017: 294)。西洋キリスト教的な観念に基づくと、裸体と衣服は対立関係に置かれ、それぞれが動物性と人間性を意味している(ゴルセンヌ 2017: 296)。つまり、装いは実に人間的な行為であり、人間としての普遍的行為なのである。ここでゴルセンヌが述べる「装い」とは、「人間を人工的かつ人為的ななものかによって身体を覆うこと」だ。被服心理学の分野では、衣服や「ファッション」、「おしゃれ」などと形容される身体の装飾が着用された状態のことが装いと捉えられる(小林 2017: iii-iv)。

被植民者の装いを対象に、アイデンティティの表出である服装が画一化される過程を考察したロス(2016)は、装い(dress)を「衣装だけでなく、髪形や刺青、身体装飾まで、外見全体を指す」と定義した(ロス 2016: 7-8)。また、美しさと快樂という視点から装いをめぐる人類学を切り開くことを目指した宮脇と風戸(2017)は、「装い」に視覚以外の観点を付け加える。彼女らはアイヒャーら(1995)のドレス観を参照しながら、布状の衣服のみならず、「人が文化・社会的規範に則って身体上に表現していることすべてをドレス」と捉え、身体装飾なども含めた装いとして定義した(宮脇・風戸 2017: 266)。

このように、「装い」という言葉は使用される文脈によって様々に意味を変える。本研究では、ロス(2016)と宮脇・風戸(2017)に従い、装いを「衣服、身体装飾、髪型、五感などを含んだ、身体上での表現」と定義する。

(2) 文化としての装い

文化としての装いとは、「装いの実践を文化的に捉える視点」を指す(宮脇 2017: 29)。ここでは、衣服の生産から着ることまでのすべての行為と、その背景にある社会的文脈と文化的理論が対象となる(宮脇 2017: 29)。なぜならば、服を着るといふ行為は社会的な文脈に埋め込まれており、特定の文化的な論理が絡み合うなかに成立し、装いの主体者自身を形成する営みでさえあるからだ(宮脇 2017: 30)。

「文化としての装い」という視点においては、「服を着る」という行為のみが「着る」ことのすべてを包括するわけではない。例えば西江(1980)は「着る」ことに関して、示唆的な論考を与える。彼は、「着る」ということに、身体付加行為や身体変工行為をも含めた(西江 1980: 163)。さらに、「着る」と「裸」についてはエントウィスル(2005)が詳しく述べる。すなわち、あらゆる文化では、身体に何かを付け加えたり、除去したり、飾ったりというような装いを施すことが求めら

れている。あるいは、「ヌードとは決して単なる裸ではなく、衣服についての同時代の慣習によって『装われたもの』なのである」(エントウイスル 2005: 12)とされたように、何も装わないということですら文化によって規制されているのだ。この意味で、「社会的裸」は存在しないと言えよう(宮脇 2017: 31)。同様のことはアイヒャーとサンバーク(Eicher and Sumbarg)によっても定義される。アイヒャーとサンバークはドレス(Dress)を視覚で関知するものだけでなく、身体への香り、味、感情という感覚の変革(body modifications)と、衣類、宝石、装身具などの補完(body supplements)をも含むとした(Eicher and Sumbarg 1995: 1)。以上をまとめると、装いを「人間行為や社会的関係性の中に埋め込まれた存在として見ること」(エントウイスル 2005: 16)こそが文化としての装いという視点である。

(3) 装いの分類

本研究では、他の装いと比較しながら装いとしてのフェイクタトゥーの特徴を明らかにする。そのために、比較の際に使用する指標として2つの分類を提示する。

1つ目は、ジンメル(1998)による装いの分類である。彼は、装いを3つの形式に区分した。それは、「未開」のイレズミと、(西洋の)衣服と宝飾品である(Simmel 1998: 79-88)。

ジンメル(1998)によると、イレズミは個性的なもので、宝飾品はそれとは対照的に非個性的なものである。衣服は両者の中間にあり、新品の衣服は非個性的、着古された衣服は個性的なものとする(Simmel 1998)。以下にこれをまとめる(衣服については着古された衣服と新品の衣服を分類した)。

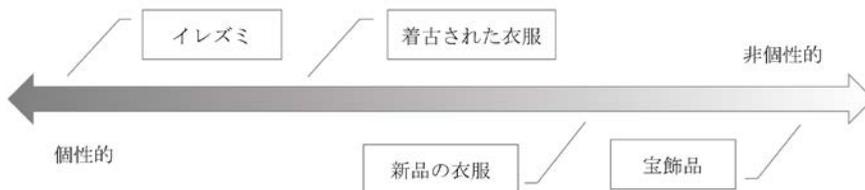


図 2-1: ジンメル(1998)による装いの3分類とそれぞれの個性の指標

出所: Simmel(1998)をもとに筆者作成

ここで言う「個性的」、「非個性的」というのは、いかに身体に付着しているかということ、そして持ち主をその個性に閉じ込めるかという点で区別される(Simmel 1998)。

イレズミは消えることがない。身体に付着しており、身体や肌から消え去ることができないという点で、イレズミは個性的なものである(Simmel 1998)。一方、宝飾品は身に着けられるが身体に属すことはない。さらに、取り外したり贈ったりすることが可能である。このイレズミとの対極性により、宝飾品は非個性的なものと言うことができる(Simmel 1998)。

衣服については身体に属すことなく着脱可能なため、その点では非個性的なものと言えるかもしれない。しかし、ジンメル(1998)は衣服について、持ち主の個性を閉じ込めるかどうかという点から論じる。新品の衣服は持ち主の身体を覆うのみで、持ち主の個性とはならない。この点で、新品の衣服は非個性的である(Simmel 1998)。反対に、着古された衣類は持ち主に「似合い過ぎる」、つまり持ち主の個性となる(Simmel 1998)。

すなわち、ジンメル(1998)が述べる「個性的」、「非個性的」とは、持ち主の個性がその装いによって規定されるか否かということに他ならない。イレズミと着古された衣服は「持ち主をその個性に閉じ込める」(ゴルセンヌ 2017: 299)。宝飾品と新品の衣服は「その持ち主の周りに非個性的な領域を作る」(ゴルセンヌ 2017: 299)。さらに、その領域は拡大し、他者が加わる余地にさえもなり得るのである(Simmel 1998)。

2つ目が、雪村(2005)と風戸(2017)の身体装飾の分類である。風戸(2017)は、身体装飾について、その介入方法の違いによって身体装飾を「装身具」、「身体彩色^{しんたいさいしき}」、「身体変工」の3つに分類した。風戸は身体彩色と身体変工の違いとして「可塑性と娯楽性」が強い、「不可逆的で痛みをともなう」ということを挙げた(風戸 2017: 348)。さらに、身体装飾は「身体を直接加工する」、つまり「身体的」、アクセサリや宝石などの「外的な装身具を用いる」、つまり「外部的」という2つの形態によって分類される(雪村 2005: 140)。だが、すべての身体装飾がこの分類の枠に収まるわけではないということに留意したい。

例えば、ピアスは耳につける装身具という点ではイヤリングと同様の用途で用い

られる(雪村 2005: 140)。だが、装着するために耳に穴を開けなければいけないという点では装身具と身体変工両方の性質を含んでいると言える(雪村 2005: 139)。このように、装身具、身体彩色、身体変工は重複した部分を持つこともある(風戸 2017: 348)。これらをまとめた表を示すと以下のようになる。

表 2-1: 身体装飾の分類とその形態・特性

	装身具	身体彩色	身体変工
装飾の形態	外部的	身体的	身体的
特性		可塑性 娯楽性	不可逆的 痛みを伴う

出所: 雪村(2005)と風戸(2017)をもとに筆者作成

第 6 章においては、これらの分類をもとにフェイクタトゥーを装いのなかに位置付け、フェイクタトゥーがどのような装いであるのかを考察するための手がかりとする。

3. 民族誌的背景

「日本人がタトゥーを彫っていたらこわいと思うけど、外国人が彫っていたらおしゃれだと思うな」「この間イレズミ彫ってる人見てさ、うわ、やっさん(やくざのこと)だーって思ったんだよね(笑)。でもイレズミ以外は『普通の』人だったよ」。これらは、筆者の友人たちがイレズミについて話したことである。Kuwahara(2005: 12)は、友人から「日本でイレズミを入れたら『普通の』男性とは結婚できないよ」と言われたという。

日本語で様々に書き表される「イレズミ」は、表し方それぞれで異なる意味を持っている。古来より習俗として行われてきたイレズミの意味は歴史的に変遷してきたが、明治時代の近代化政策の一環として用いられた「イレズミは野蛮である」と

いう言説や、昭和期の映画に見られるような「彫り物を背負ったやくざ」という強烈な印象が最終的には現代のイレズミの負のイメージを形作っている(山本 2016: 53)。よって、ひとたびイレズミについての話題が世間に出れば、その是非を問う論争がしばしば巻き起こる。そのような意味で、イレズミは日本社会におけるタブーであると言っても過言ではないだろう。その一方で、イレズミを取り巻く状況は少しずつではあるが変化している。若者がイレズミをファッションや自己表現の手段として用いるようになったことや、市民の国際的な交わりによるタトゥー文化との接触のなかでイレズミに関する規制が再検討されつつあることを鑑みると、今後のイレズミに対する日本人の印象は何らかのかたちで変わっていくことが見込まれるだろう。

これまで、日本のイレズミ研究に関しては、行為そのものの意味を問うものが盛んであった。そのなかでも特に多いのが、イレズミと個人の内面、すなわち「精神世界」との結びつきについての言及である。イレズミは往々にして自己変革の手段として捉えられる(斎藤 2005)。その際に重要視されるのがイレズミの痛みと彫り師との密接な関係性、そしてイレズミをあえて顕さないという美学(むしろ積極的に隠すこと)である(斎藤 2005; 山本 2016: 173)。従来の研究からは、イレズミを彫る目的やイレズミという行為の意味とイレズミを彫る痛み、彫り師と彫られる人との関係性、そしてイレズミを隠すことは複雑に関係しあっていることがわかった。その一方で、本研究が対象とするフェイクタトゥーの実践においては以上のような関係性は見られず、さらにそれぞれの事項も重要視されていなかった。では、フェイクタトゥーを実践する人々はどのような理由でフェイクタトゥーを装うのか、またフェイクタトゥーの施術の際になにが重要視されているのか。本研究ではこれらを明らかにしながら、フェイクタトゥーの意義について考察していく。

4. フェイクタトゥーとフェイクタトゥーサロン G

(1) フェイクタトゥー

一般的にフェイクタトゥーとはタトゥーシールと呼ばれる転写シールのことを指す(坪井 2002: 74-77)。しかし、筆者がフィールドワークを行なったフェイクタトゥーサロン G ではタトゥーシールは使用されておらず、専用の顔料やペーストを用い

て肌にタトゥーのようなペイントを施すという活動が行われていた。

本研究では、「消えるタトゥー」や「シェードタトゥー」、「テンポラリータトゥー」と呼ばれる、タトゥーのように見えるが一定期間で消える比較的安価なボディアートの総称として、フェイクタトゥーという語を用いる。具体的には、スプレーを吹きかけてイレズミのようなデザインを描くフェイクペイント、水を用いてデザインを転写するタトゥーシール、染色作用のある植物のペーストを肌に乗せ、デザインを描くヘナペイントやジャグアペイントなどを指す。

(2) フェイクタトゥーサロン G

フェイクタトゥーサロン G は仙台市唯一のフェイクタトゥーサロンである。このサロンのオーナーである M さんは開業以前からフェイクタトゥーの施術を行っていた。しかし、客からの要望を受け、休業期間を経てタトゥー(洋彫り)の施術も行うようになった。また、フェイクタトゥーサロン G ではフェイクタトゥーとタトゥーのほかにもマタニティペイントやタトゥーやフェイクタトゥーの技術を身に着けるためのスクールも開講していた。

筆者は実際にジャグアペイントの施術を受けるにあたり、SNS を用いてオーナーに連絡を取った。サロン内は白を基調とした清潔感漂う明るい空間となっており、施術中は当り障りのない世間話を行う。オーナーの M さんが話した開業のきっかけのとおり、どうしても悪いイメージ、怖いイメージを抱きがちなタトゥーサロンであるが、フェイクタトゥーサロン G ははじめてタトゥーを入れたと考えている人や女性でも気軽に予約でき、恐怖心や警戒心を抱きにくい店づくりが行われている。

① 予約から来店まで

フェイクタトゥーサロン G は完全予約制のサロンである。当日空きがある場合は事前に連絡すれば飛び込みでの施術も受け入れてもらうことができる。

予約は LINE¹、電話(携帯電話)、メール、ホームページの問い合わせフォームから行う。筆者はいつも LINE 上で予約をしていた。

フェイクタトゥーサロン G のホームページ上には予約者への注意事項が詳細に掲

¹ LINE とは「スマートフォンアプリを中心に無料でチャット(トーク)や通話を利用でき、ゲームや音楽など関連サービスも楽しめるコミュニケーションツール」である(アプリオ編集部 2018)。2016 年段階の利用者数は日本国内で 6,800 万人以上にも上る(アプリオ編集部 2018)。

載されている。予約者はこの注意事項に従って多少の準備が必要である。ホームページに記載されたヘナ・ジャグアペイントの注意事項について見ると、色素が沈着しやすいように施術部分の角質や体毛を除去しておくことや施術後は汗をかかないようにするということが特に強調されている。また、フェイクタトゥーでも本物のタトゥーと同様に温泉やプールなどに入れられない可能性があるということも事前に告知されていた。

②来店から施術まで

定禅寺通り沿いに面する商業ビルの4階に位置するフェイクタトゥーサロンGへの移動は階段か階段の奥にあるエレベーターを使用する。造花などが飾り付けてある紫色の扉を開けるとすでにスリッパが用意されており、「こんにちは」と声をかけるとフェイクタトゥーサロンGのオーナー、Mさんが「お待ちしてました」と迎え入れてくれる。靴をシューズボックスにしまい、Mさんの後について行く。入り口から見てすぐ左側の個室がフェイクタトゥーサロンGの店舗である。

個室に入ると入り口すぐのいすに座るように促されるので、ベッド脇の荷物かごに荷物をしまい、上着をハンガーに掛けていすに座る。初回の場合、この時に簡単なカウンセリング用紙と同意書が手渡され、回答する。カウンセリング用紙には生年月日、住所などの個人情報記入欄と、汗をかきやすいか、アレルギーはあるかなど施術やペイントの出来に関係する質問があった。同意書には染料に人工物が入っていないが、アレルギーがある人は施術を受けないことを推奨するということや、自己責任で施術を受けるということが書かれていた。

まず決めるのがペイントのサイズとデザイン、ペイントを入れる場所である。デザインは持ち込みが可能で、あるいはフェイクタトゥーサロンGに置いてあるデザインブックの中から選ぶこともできる。デザインブックはデザインが描かれた紙がクリアファイルでファイリングされたもので、花、文字、太陽、動物などテーマごとに分類されている。首を吊る少女と**GAME OVER**という文字の組み合わせ、近親相姦と思われる様子を描いたデザインなど、反社会的なモチーフも所々に見受けられた。

Mさんがペイントの柄や場所を提案したり、アドバイスを与えたりすることもある。以下では11月2日の施術の様子を記述する。筆者が迷いながらデザインブックを見ていると、Mさんが声をかけてくれた。

M「どうですか?」

筆「いやー、迷いますね」

M「ですよー」

筆「フクロウとか可愛いなって」

M「あー、可愛いですよ」

筆「折り鶴も好きです!」

M「折り鶴は最近人気ですよ。今年はシンプルなデザインが流行ってるので」

筆「あ、そうなんだ。じゃあ折り鶴にしようかな...、折り鶴をお願いします」

M「了解です。そしたら手首なので、コインサイズくらいですね。1,800円になります」

筆「はい」

M「あと鶴の向きなんですけど、(手のひら側と肘の側)どっちを上(頭)にします?」

筆「手のひらの方上をお願いします」

M「はい。あんまり上すぎると(袖から見えて)あれ(微妙)なので、少し下にやっていますね」

筆「わ、(気を遣って頂いて)ありがとうございます」

このように、筆者は自分でデザインを決めることもあれば、Mさんと相談し流行などを聞きながらデザインを決めることもあった。ここで注目したいのは、手首にペイントを施したいという筆者に対し、Mさんは筆者が示した位置よりも少しだけ肘側、つまり長袖で隠れるような場所への施術を提案したことである。このことから、Mさんはジャグアペイントが他人から見えやすい位置に施されていることで、筆者が何か不利益を被ると考えていることが分かる。

ジャグアペーストを皮膚に乗せる前に施術部分のピーリングを受ける。ピーリングとは専用のピーリング剤を用いて皮膚表面の古い角質を除去することである。先述した注意事項にもあったように、色素沈着を促すために施術部位の角質を除去しておく必要があるためにこの作業が行われる。

ジャグアペーストは長さ5センチ、直径2センチほどのボトルに入っている。これにニードルを取り付け、肌に乗せていくのだ。

Mさんは黒い腰巻きエプロンと黒い布マスクを身につけ、綺麗なネイルアートが施された右手にペーストの入ったボトル、左手にティッシュと綿棒、爪楊枝を持ちながら器用にデザインを描いていく。痛みは全くないものの、粘度の高いペーストは冷たく、皮膚に新たに乘せられるたびにひやりとする。明るい洋楽が流れ、それまで和やかだった雰囲気もMさんの集中力のせいかわず少し緊張感を孕んでいるように感じられた。施術を受けているのは10分程度である。

「はい、終わりました」との声で、緊張がほどける。施術されたペーストを見ると、少しだけ盛り上がってぷっくりとしている。ベッドの脇に置かれている姿でデザインを確認するように言われて覗くと、筆者の肌にはタトゥーが刻み込まれているようで、初めての施術の際には思わず「すごい!」と声を上げてしまった。Mさんは筆者に確認を取り、サロンのInstagram²に載せるために施術部分の写真をスマートフォンで撮影した。

③アフターケア

初回の施術が終了すると、アフターケアについての注意が書かれた用紙を渡される。用紙には、ペーストを洗い流す方法やペイントを長持ちさせる方法などが書かれていた。

まず、ペイントを長持ちさせるためにはより長時間ペーストを皮膚に定着させておく必要がある。平均的には6時間ほどで色素沈着するが、できる限り長く定着させておくことが推奨された。ペーストを洗い流す際には石けんやボディーソープをつけ、ペーストのぬめりがなくなるまで優しく洗い落とす。この時に強くこすると色素沈着した角質が落ちてしまうので注意が必要だ。

沈着した色素が発色するのはペーストを落としてから約12~24時間後である。発色具合は施術部位やアフターケアの出来によって異なる。ペーストを落とし、発色した後の入浴は普段通り行ってよいが、ペイント部分を強くこするとその分消えるのが早くなってしまう。逆にヴァセリンやリップクリームをペイント部分に塗って入浴したことで2週間以上ペイントが持続したという事例もあるとのことだった。実際に筆者が施術した際も20日程度ペイントが持続したこともあった。

筆者は通常午前中に施術してもらうため、施術の10~12時間後の入浴の際にペー

² Instagramとは写真や動画を編集、加工し共有するスマートフォン向けアプリである。日本国内の利用者数は約2,000万人と言われる(株式会社アーティス 2018)。

ストを落としている。施術後に読むアフターケアの説明にはペーストが落ち、ぬめりがなくなるまで洗うように書かれているが、筆者はペーストの上から保護シートを貼っているため、シートと一緒に剥がれてしまう。ペーストが落ちた後の顕わになった施術部分には、デザインが薄く浮かび上がる。ジャグアペーストの紺色が着色しておらず不安を覚えるが、発色は12~24時間後だと説明を受けたことを思い出して胸をなで下ろすのである。

以上がフェイクタトゥーサロン G への来店、ジャグアペイントの施術、帰宅後のアフターケアという一連の流れである。この流れを経てジャグアペイントは翌日には発色し、10日から2週間かけて徐々に薄くなり、消えていく。

5. フェイクタトゥーの2つの特徴

フィールドワークを通して明らかになったフェイクタトゥーの特徴は2つある。以下にそれを示し、その根拠となる事例を詳しく記述する。

(1) 「本物の」イレズミ同様の「リアルさ」

Mさんによると、ジャグアペイントは「本物の」イレズミを入りたいが家族に反対されているなど、何らかの事情があって入れることができない人や、イレズミを入れてみたいが踏ん切りのつかない人、イレズミを入れる前に実際に入れたときのイメージを膨らませたい人などが使うことが多いという。

フェイクタトゥーにおける「イレズミらしさ」として、「ぼかし」という手法を例に挙げる。ぼかしとはイレズミにも用いられる手法で、デザインの輪郭と輪郭の間を色素で埋めたり、グラデーションをつけたりすることができる(山本 2016: 46)。塗り絵の色づけ作業に喩えると分かりやすいだろうか。ジャグアペイントではデザインの輪郭にペイントを乗せたあと、色やグラデーションを付けたい範囲に爪楊枝で薄くペーストを塗り広げていく。筆者は初回の施術の際、ぼかしを「本物っぽい仕上がりになる」として勧められたが、断っている。ここで、はじめてぼかしを入れた11月2日の施術中の会話を記述する。

M「今日はぼかしを入れちゃっても大丈夫ですか?」

筆「ぼかしをいれると本物のタトゥーっぽくなるんですよね」

M「そうですね!」

筆「じゃあお願いします」

M「はい」

筆「(ジャグアペイントをする人で)ぼかしを入れる人って結構多いんですか?」

M「半々くらいですかね。本物っぽくしたいって言う人はぼかしを入れてますね」

このように、ぼかしにはジャグアペイントを本物のタトゥーのように見せる効果がある。Mさんによると、フェイクタトゥーサロンGでジャグアペイントを施術する人の約半数がぼかしを入れる。つまり、ジャグアペイントを施す人々は、一定数ジャグアペイントを本物のタトゥーのように見せたいという願望を持っているのである。

また、客のこのような願望が顕れた事例として、ヘナペイントの廃止がある。ヘナは北アフリカ、西南アジア、インド、パキスタンなどで産生される植物で、古くから身体装飾、魔除け、治療などの目的で使われてきた(小野 2010: 28-29)。色素はオレンジや赤色で、何らかの人工物質を混ぜると黒色に近づく(小野 2010: 30)。

筆者は、フェイクタトゥーサロンGのメニューにヘナペイントがあったことを記憶していたため、試しにヘナペイントを予約した。しかし、ヘナペイントを廃止した旨が伝えられた。以前はやっていたが、現在は2か月に一度程度でしか予約が入らなくなったためだという。ヘナペーストは専用の粉末にレモン汁やコーヒーなどを入れて練って作り、数日寝かせなければならない。使用期限もあるため、数ヶ月に1回の予約のために材料を仕入れることはしないが、まだ以前予約を受けていた際の粉末が残っているので、複数人から同じタイミングでヘナペイントをやりたいと要望があれば受け付ける場合もあるそうだ。ここからは、客が単に「消えるタトゥー」としてフェイクタトゥーを選択しているのではなく、ジャグアペイントが抱える「本物の」イレズミらしさを好意的に捉えたうえで、あえてより「本物らしい」ペイントを選択しているのである。

しかし、客たちは以上のようなジャグアペイントの「本物らしさ」によって、「本物の」イレズミと同様の規制を受けることもある。例えば、フェイクタトゥーサロンGの来店前の注意書きにおいて、消えるタトゥーは本物のイレズミと同じ扱いに

なるため温泉やプールを利用する際に注意を促す項目があったり、イレズミのある人に加え、タトゥーシールのある人の入浴も拒否する温泉施設があったりした。また、フェイクタトゥーサロン G オーナーの M さんは施術前の筆者に対し、ジャグアペイントを衣服で隠れる場所に施すことを提案した。筆者はこの発言に関し、「イレズミのようなもの」を入れていることで筆者が不利益を被る可能性を考慮してのものであったと解釈している。このことから、フェイクタトゥーは「本物の」イレズミのように社会的に規制を受けること、そしてフェイクタトゥーに携わる人はそれを認識しているということがわかる。

(2) 「本物の」イレズミとは対極的な「一過性」

筆者のフェイクタトゥーを見た周囲の反応は大きく 3 つに分けられた。この反応からは、フェイクタトゥーに関心がある、ないに関わらず、フェイクタトゥーの利点として捉えられる特徴が明らかになった。

まず、最も多かった反応が「え、それ本物!?!」と筆者のジャグアペイントを本物か偽物か疑うものであった。この反応をした人々はもちろん筆者がジャグアペイントの施術をしたということを知らない。友人たちはひとしきり驚いた後、「本物じゃないでしょ」「あなたがそんなこと(イレズミを入れること)をするわけがない」「それ、タトゥーシール?」と筆者のペイントを偽物だと決めつけるか、「痛かった?」「急にどうしたの?」「何かあったの?」と本物のイレズミだと信じ、啞然とした顔で矢継ぎ早に質問を浴びせかけるのである。

次に多かったのが、ジャグアペイントを見るとその真偽を確かめる間もなく「やくざじゃん!」「冴衣ちゃん(筆者)が不良になった!」という反応をする人である。この反応からは、「イレズミ=やくざ」「イレズミ=悪」という考え方がかなり浸透していることが分かる。

そして、筆者がジャグアペイントをしていることを知っている人の多くは「可愛い!」「私もやってみたいな」など、好意的な反応を示す。友人たちがこのように言うのは、筆者のペイントが消えるものだと知っているからである。彼ら彼女らは、このような発言をする前には必ずジャグアペイントが消えるということを筆者に確認する。つまり、「消える」イレズミだからこそ自分もやってみたいという気持ちになっているのだ。

さらに、この「消える」というフェイクタトゥーの特徴は、他の装いを比較した

とき、かなり独特なものである。

フェイクタトゥーはイレズミとだけ比較すると「一時的」、アクセサリや衣服など他の身体装飾と比較すると「少しだけ持続期間が長い」身体装飾であると言える。イレズミとその他の身体装飾の両者とフェイクタトゥーを比較すると、「中期的な持続」という独自の性質が浮き彫りになる。すると、フェイクタトゥーの「一過性」という「本物の」イレズミとは対極にある性質という特徴には少々訂正を加える必要が出てくるだろう。身体装飾として独自の位置にあるフェイクタトゥーの「一過性」という性質は、単純に「一定期間で消える(一過性)」という意味だけでなく、「一定期間は消えない(一定期間の持続性)」という意味も併せ持った、いわば「過続性」なのである。

つまり、「一定期間で消える」というフェイクタトゥーの自由な特性は、裏を返せば「一定期間は消えない」という不自由さでもあるのだ。フェイクタトゥーは他の身体装飾と異なり、自分の意思では一定期間着脱できない不自由さをも持ち合わせている。

6. 考察

まず、第5章で示したフェイクタトゥーの特徴をもとに、フェイクタトゥーが従来研究されてきた装いのなかでどのように位置づけられるかを明らかにする。

ここで、第2章第3節で提示したジンメル(1998)の装いの分類と、雪村(2005)・風戸(2017)の身体装飾の分類とその形態・特性であるにフェイクタトゥーを対応させる。

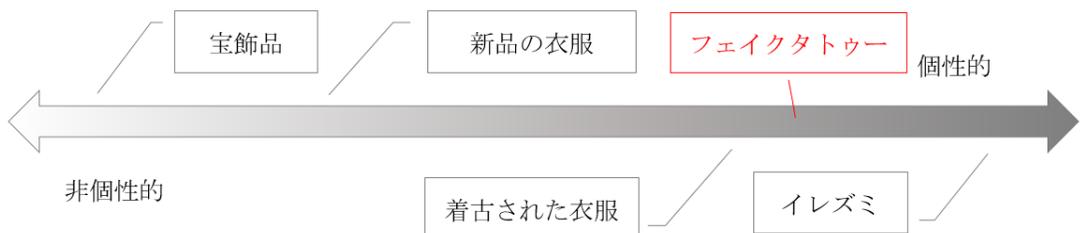


図 6-1: 装いの分類にフェイクタトゥーを対応させたもの

出所: 筆者作成

まずはジンメル(1998)による装いの分類である。彼が述べる「個性的」、「非個性的」とは、「着脱可能かどうか」、さらに「持ち主の個性がそれによって規定されるかどうか」という視点で決定されている。フェイクタトゥーはイレズミのような永久性は持ち合わせていないため、イレズミよりは個性的なものではない。しかし、2週間程度は消えることがなく、その期間は持ち主の個性となり得る。着古された衣服は持ち主の個性を閉じ込めるが、その着脱はフェイクタトゥーよりも容易かつ自由だ。フェイクタトゥーの着脱は衣服の着脱と比較すると自由度は低い。このような点から、フェイクタトゥーはイレズミと着古された衣服の中間の特質を持つ装いであると言える。

次に、雪村(2005)と風戸(2017)の分類を見ていこう。

表 6-2: 身体装飾の分類と形態・特性にフェイクタトゥーを対応させたもの

	装身具	身体彩色	フェイクタトゥー	身体変工
装飾の形態	外部的	身体的	身体的	身体的
特性		可塑性 娯楽性	可塑性(一定期間の不可逆性) 身体変工(イレズミ)のような 見た目	不可逆的 痛みを伴う

出所: 筆者作成

ここでは、身体彩色と身体変工の間にフェイクタトゥーを位置づける。フェイクタトゥーは外的な装身具を用いた身体装飾ではないため、装飾の形態は身体的である。特性については可塑性があるとしながらも、一定期間の不可逆性も抱えている。また、身体変工のように痛みは伴わないが、完全な娯楽として消費されているわけでもない。イレズミの代用としてフェイクタトゥーを用いる人にとって、フェイクタトゥーは「本物の」イレズミとなる可能性をはらんでいる。そのため、筆者は身体彩色と身体変工の間にフェイクタトゥーを置いた。

次に、この2通りの分類を組み合わせ、より細かい装いの分類を提示したい。ジンメル(1998)と雪村(2005)、風戸(2017)の分類にそれぞれフェイクタトゥーを対応させたものをまとめ、装いにおけるフェイクタトゥーの位置づけとしたものが下の

図である。

	装身具 宝飾品	新品の 衣服	着古された 衣服	身体彩色	フェイクタトゥー	身体変工
装飾の形態	外部的	外部的	外部的	身体的	身体的	身体的
特性	可塑性 娯楽性	可塑性 娯楽性	可塑性 娯楽性	可塑性 娯楽性	可塑性 娯楽性 一定期間の不可逆性 身体変工(イレズミ)の ような見た目	不可逆的 痛みを伴う

図 6-2: 装いにおけるフェイクタトゥーの位置づけ

出所: 筆者作成

フェイクタトゥーは、装身具(宝飾品)と身体変工をそれぞれの極に設定した場合、装いのなかで比較的身体変工に近いものと言える。また、風戸(2017)は身体装飾を装身具、身体彩色、身体変工の3つに分類したが、フェイクタトゥーはそのどれにも当てはまらない独自の立場をとる。あるいは、雪村(2005: 139)がピアスをピアッシングという身体変工と装身具とで構成されている、身体装飾の二つの領域にまたがるものであると述べたように、フェイクタトゥーにも同様のことが言えるかもしれない。

例えば、フェイクタトゥーの施術方法は身体彩色と言っても差し支えないだろう。しかし、施術後(一定期間は)消えないことや、見た目が身体変工に分類されるイレズミと類似していることを考えると、フェイクタトゥーは身体彩色と身体変工両方の特質を持ち合わせた身体装飾でもある。また、これはイレズミに関しても同様に言える。すなわち、身体に傷をつけ、永続的に図柄を身体に彫り入れるという点で、イレズミは身体変工である。一方で、皮膚に染料をのせるという場面のみを切り取ると、それは身体彩色と表現できはしないか。

筆者は、フェイクタトゥーとイレズミに身体変工と身体彩色両方の側面を見出し

たとき、「フェイクタトゥーはイレズミなのか」という問いに対して1つの回答を与えることができると思う。

イレズミは、その永続性や痛みという身体変工の面がデメリットとして強調される場合が多く、単純な装飾として用いるにはハードルが高い。対して、イレズミがファッションやおしゃれという文脈で語られるとき、注目されるのはデザイン、つまり身体色彩的な側面だ。雪村(2005)を参考に身体変工/(純粋な装飾としての)身体彩色、現代日本社会におけるイレズミの肯定的側面/否定的側面を軸にしたフレームに当てはめると下のようになる。

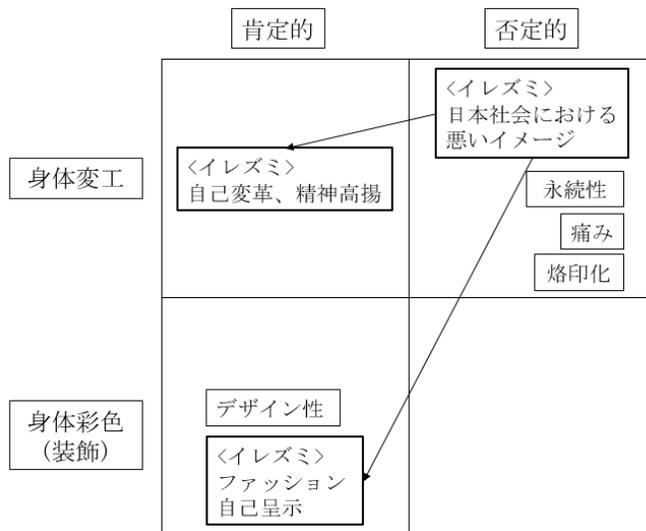


図 6-3: イレズミの肯定的側面と否定的側面の分布

出所: 筆者作成

一方で、フェイクタトゥーのイレズミのような見た目は、ステレオタイプ的な考え方によって否定的なイメージを持たれる要因となるが、その一時性や痛みのなさはフェイクタトゥーをおしゃれとして気軽に使用する際に利点とされる。

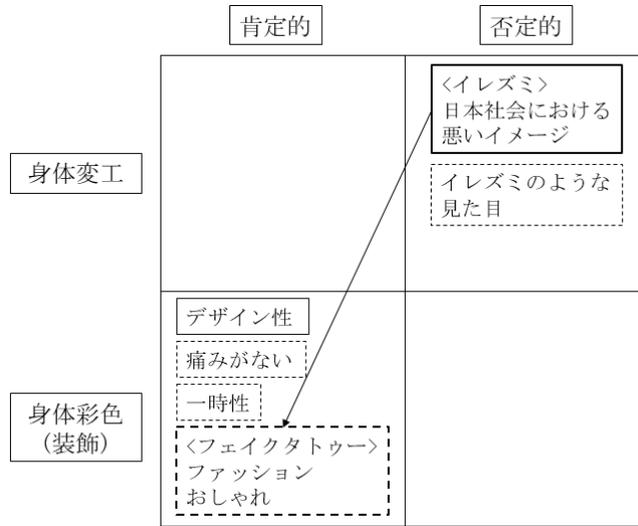


図 6-4: フェイクタトゥーの肯定的側面と否定的側面の分布

出所: 筆者作成

つまり、イレズミ(という身体変工)としての外観を保ちつつ、肯定的側面として利用されるのは彩色という純粋な装飾の極に配置される性質なのだ。図 6-3 と図 6-4 からは、フェイクタトゥーがイレズミの装飾面を補強しうる可能性が見込める。これらからフェイクタトゥーとイレズミの関係性を導き出し、筆者は「フェイクタトゥーは装飾性が強調されたイレズミである」と考える。つまり、フェイクタトゥーの「フェイク」はイレズミの身体変工的側面に係っており、フェイクタトゥーは「偽物のイレズミ」ではなく『身体変工ではない』イレズミ」なのである。ここにおいて、筆者は「フェイクタトゥー」ではなく、イレズミの代替品、つまり「オルタナティブタトゥー」としての可能性を提示する。

現在のイレズミを取り巻く状況は刻一刻と変化している。筆者はここで、『身体変工ではない』イレズミ』としてのフェイクタトゥーが効果を発揮すると考える。

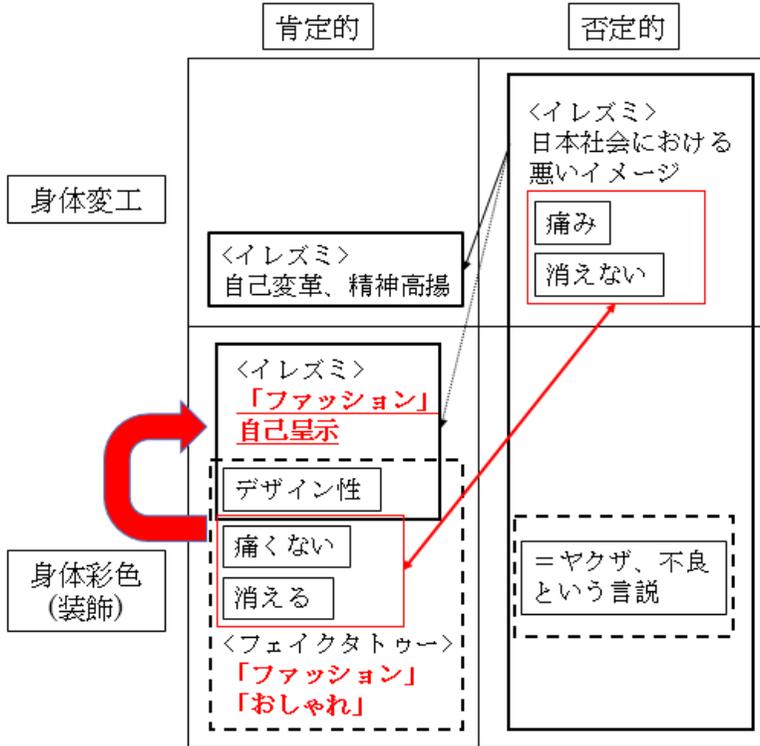


図 6-5: 『身体変工ではない』イレズミ」が果たす効果

出所: 筆者作成

これまでイレズミにマイナスのイメージを与えてきた、施術の際の痛みや消えないという不可逆性は、フェイクタトゥーというイレズミの代替物によって打ち消される。そして、フェイクタトゥーは「イレズミ」の装飾的側面を強調し、そのさらなる受容を助けるものとなり得るのではないだろうか。

本論を通して明らかになったのは、フェイクタトゥーの実践者たちは、それぞれの目的に合わせ、フェイクタトゥーの利点を戦略的に抽出し、数ある装いのなかからフェイクタトゥーを選択し装うということである。これらの選択は本物のイレズミを入れているかの様なリアルさと、フェイクタトゥー独特の一時性というフェイクタトゥーの表裏一体的な特徴によって成り立っている。つまり、フェイクタトゥーの一定期間で消えるという性質は、日本におけるイレズミへの社会的規制の範囲の中で、「イレズミのようなもの」を装うことに免罪符を与えているのだ。ここにおいて、筆者は、フェイクタトゥーの意義を「イレズミという特定の身体装飾が忌避

される現代日本社会」における装いの規範を超えることであると考え。さらに、『身体変工』ではないイレズミ』としてのフェイクタトゥーが注目されることによって、そのデザインや装いとしての側面に注目が集まることが期待できるだろう。そして、フェイクタトゥーへの関心や肯定的な考え方が、装いとしてのイレズミの魅力に目を向けさせるものになる可能性を提示する。

7. おわりに

ここまで、フェイクタトゥーの実践の様子を記述し、フェイクタトゥーの特徴と意義、そしてその効果について検討してきた。本研究では、フェイクタトゥーを装うという選択に密接に関わるフェイクタトゥーの特徴を示すことができた。その目的は多様ではあるが、フェイクタトゥーを装う人々は、イレズミさながらの見目でありながらイレズミとは異なる「消える」という特性を利点として捉え、フェイクタトゥーを採用する。つまり、フェイクタトゥーは依然としてイレズミに対する悪評が強く残る日本社会における装いの規制を乗り越え、自由に装いを選択することを可能にしているのだ。

加えて、この2つの特徴によって、フェイクタトゥーとはどのような装いであるのか考察した。筆者は、フェイクタトゥーは他のどの装いとも異なる独自の装いであり、身体彩色的側面と身体変工的側面に区別できるとした。さらに、この区別をイレズミに関しても適応することで、フェイクタトゥーが「偽物の」イレズミではなく、イレズミの装飾(身体彩色)的側面を代用する「オルタナティブタトゥー」と捉えられるだろう。このようなフェイクタトゥーの普及により、イレズミの装飾面の魅力、延いてはイレズミそのものの魅力が見直され、その受容の促進が期待される。これこそがまさに、現代日本社会におけるフェイクタトゥーの効果なのである。

引用文献

アプリオ編集部

2018 「LINE とはどんなサービスか」 <<https://appllio.com/what-is-line>>より、

2018年12月8日取得。

Eicher, B. and Sumberg, B., ed.

1995 *Dress and Ethnicity: Change across Space and Time*, Oxford: Berg.

エントウイスル、ジョアン

2005 『ファッションと身体』鈴木信雄訳、東京：日本経済評論社。

ゴルセンヌ、トマ

2017 「装いの系譜学—記号学的モデルとしての紋章から有機的モデルとしての織物まで」 笈菜奈子訳『現代思想三月臨時増刊号』45(4): 294-316。

風戸真理

2017 「<特集論文 2>身体装飾をめぐる子ども・大人・社会の交渉」『コンタクト・ゾーン=Contact zone』9(2017): 347-366。

株式会社アーティス

2018 「今さら聞けない大人気 “ Instagram ” の魅力」
<<https://www.asobou.co.jp/blog/life/instagram>>より、2018年12月9日取得。

小林茂雄

2017 「はしがき」小林茂雄・藤田雅夫編『装いの心理と行動—被服心理学へのいざない』pp.iii-iv、東京：アイ・ケイコーポレーション。

Kuwahara, Makiko

2005 *Tattoo: An Anthropology*, New York: Berg.

宮脇千絵

2017 『装いの民族誌—中国雲南省モンの「民族衣装」をめぐる実践』東京：風響社。

宮脇千絵・風戸真理

2017 「序—装いの人類学に向けて—審美性への着目から」『コンタクト・ゾーン=Contact zone』9(2017): 264-278。

西江雅之

1980 「裸になれないサル」多田道太郎編『着る—装いの生態学』pp.160-181、東京：平凡社。

小野友道

2010 『いれずみの文化誌』 東京: 河出書房新社。

ロス、ロバート

2016 『洋服を着る近代—帝国の思惑と民族の選択』 平田雅博訳、東京: 法政大学出版局。

斎藤卓志

2005 『刺青墨譜 なぜ刺青と生きるか』 神奈川: 春風社。

Simmel, Georg

1998 *La parure et autres essais*, Paris: de la Maison des sciences de l'homme.

新村出

2018a 「よそおい」『広辞苑第七版』 pp.3032、東京: 岩波書店。

2018b 「よそお・う」『広辞苑第七版』 pp.3032、東京: 岩波書店。

坪井正和

2002 「フェイクタトゥー」『化粧文化』 42: 74-77。

山本芳美

2016 『イレズミと日本人』 東京: 平凡社。

雪村まゆみ

2005 「現代日本におけるピアスの普及家庭—新聞および雑誌記事のフレーム分析」『奈良女子大学社会学論集』 12: 139-157。